

『どうぞ』

宮城県 古川学園高等学校 一年 佐々木 綾子

「どうぞ」という言葉は心と心をつなぐ言葉だ。「どうぞ」とは人に何かを譲る時、人に何かをしてあげる時に使う言葉だ。

私は東日本大震災において、この言葉の重要性を実感した。

私は、あの地震が来た時、またいつものものが来たのだろうと思った。しかし、何分何秒経つても止まず、揺れの大きさはだんだんと増していった。あまりの揺れの大きさ、あまりの揺れの長さに泣きだす友人もいた。やつと揺れが止まった時、避難態勢に入った。パニック状態で皆押し合いながら避難するのだろうと思っただけ、そんな様子はなく、ぶつかり合いそうになると「どうぞ」と譲り合いながら避難する人がほとんどだった。

ここでも「どうぞ」の言葉のすごさを実感した。

家の人が迎えに来て、家に帰ると、家の中は全ての物が倒れていて、足の踏み場もなかった。暖も食料もとれなかった為、近くの避難所へ移動した。そこでは学校の職員の方々が「どうぞ、お入り下さい。布団とコートもどうぞ。」と大変親切に受け入れてくれた。家の様子を見て、疲れきっていた家族の心を和ませてくれた言葉だった。

さらに、今度は百人近くいる避難者の食事作りが始まった。調理器具はダルママスターブだ。百人近くの食事を作る為、私も手伝った。食料品は限られた物しかない。従って、各家から持ち寄った食材や調味料で炊き出しが行われた。ここでも惜しげもなく「どうぞ」と皆が提供し合い、数日間をしのいだ。人と人との助け合いを実感できた。

また、炊き出しは夜のみ、朝はおにぎりの一日二食だった為、五日目あたりから、買い出しに行かなければならなかった。ガソリンも調達出来なかった為、徒歩か自転車でスーパーへ向かった。三時間位並んでやっと十品のみ買えるという状況だった。

そんな中、あの原発のニュースを避難所の新聞で知る人が多くなっていた。雨にあたってはいけないという雰囲気になっていたが、買い出しではどうしても傘のみでは雨にあたってしまふ。急に降ってきた雨だった為、傘もカッパもなく、びしょぬれになりかけていた人達もいた。そんな中で店が開店し、中に入っていこうとしていた人が「どうぞ」と後ろに並んでいた人達に「私が買い物をしている間さして良いですよ。」と傘を差し出した。それが何人も何人も同じように傘を差し出していた。私はカッパを着ていたが、本当に凄いなと思った。

さらに、東日本大震災ではガソリンが全く手に入らない状況が何日も続いた。底をつきそうなガソリンしか入っていない車で、唯一開店していたガソリンスタンドに母と一緒に向かった。開いていると聞いていたが、もう終了でロープを閉じるところであった。そこで入れてもらおうと思い、母がスタンドの入口に車をつけると「もう前の車で終わりなんです。」と言われた。しかし、すでに避難所まで帰るガソリンが入っていないかった為、その事を伝えると、前の車の人が十リットル分けてくれると言ってくれたのだ。母は何度も何度も御礼を言っていた。こんな時なので前の車の人はまた何時間も並ばなければガソリンを調達できないのだが、快く「どうぞ、十リットル後ろの人に入れてあげて下さい。」と言ってくれたのだった。

「どうぞ」という言葉はこれまで様々な場面で使ってきたが、何気なく使ってきたけだった。しかし、今回の東日本大震災を体験し、沢山の「どうぞ」に出会った。人に何かを譲る時、人に何かをあげる時に使う「どうぞ」は日本人の思いやりを表す言葉だと思う。

私はこの東日本大震災で、沢山の「どうぞ」に出会った。これからも、「どうぞ」が増えていったら良いなと思う。